

〈報告〉

第十三回 I C A 北京大会参加記

吉 積 久 年

I C A (International Congress on Archives) 〈国際文書館大会〉(北京大会は一九九二年カナダのモントリオール第十二回大会のあと、アジアで初めて開催されたものである。中国では、第十三届国際檔案大会と称す。

隣国という地理的条件のほか、当館で整備構想の検討をかかえている時でもあり、見聞を広く世界に求めるという意義も考慮して、当館職員としては初めての参加となった。参加者は、専門研究員の山田稔と私の両名である。全史料協(全国歴史資料保存利用機関連絡協議会)国際交流委員会(事務局は千葉県文書館)企画の九月一日(日)〜八日(日)七泊八日の成田国際空港発着の旅

であった。団長は、神奈川県立公文書館の後藤仁館長。このツアー以外にも、企業史料協の団体参加などがあり、わが国からの参加者は総計六一名を数えた。

日本を代表する国立公文書館(一九七七年加入)も全史料協(一九八六年入会)も I C A の会員である。I C A はユネスコの諮問機関で、一四九の国及び地域の一八四の機関と四九の団体などで構成される。中国の加入は一九八〇年。

実質の会議は、二日(月)〜七日(土)の五日間で、中日の五日は、万里の長城・明十三陵と紫禁城(故宮)・頤和園の市内観光が組まれた。

同時通訳が行われていたが、中国語・英語・仏語・ロシア語・スペイン語の五ヶ国語に限られており、言語の壁・国際会議の壁を痛感させられるものとなった。その上、大会事務局の案内が、ロビーの掲示板一つに限られ大変大からかでの乗車などに大いに戸惑わされた。中国を筆頭に大会参加者は約二千六百人に達し、五日の観光には大型バス約五十台が調達され、パトカー先導の大パレードとなった。

私にとって、北京は四年振り二度目の訪問であった。明らかに車の数が増大し、自転車数が目立たなくなっていた。九月、北京では最も凌ぎ易い時季であるという夏の気配が未だ濃厚だったが、わが国とは明らかに異なる湿度が低く乾燥していて、蒸暑を覚えることはなかった。だが、車の排気ガスによるスモッグは大変なもので、雲はないのだが太陽をはずきり拝むことがむづかしく、咽喉が大いにざらついた。

初日九月二日は、雨の降らない特異日(過去八一年間

四班に分かれ、市内の地方档案馆(東・西城区、豊台区、房山県)を見学する機会に恵まれ、我々二人ほか数名は西城区档案馆に赴いた。文字通り故宮の西部に位置し、毛沢東も存命中に生活した地域といい、政府機関が多く、区域の人口は七三万人という。東京都中野区と友好関係にある。

路地筋(北京市西城区二左路二七号)にあり、表通りに案内標識は見られなかった。現施設(鉄筋コンクリート造り、七階建、延床面積五一〇〇㎡)の開館は一九九四年(設置は一九八〇年)というから、未だ二年しかたっていない。金子成館長以下、職員は二三名、うち管理職四名で、大学の専門コース卒業者が七〇%を占めるといふ。九八の企業団体の档案馆を管轄し、約一〇万件的檔案を保存、うち一万三千件を公開しているという。収蔵庫の面積は一三〇〇㎡。除湿機が設置され、温度二二℃、湿度六二%であった。利用は、主に企業団体の人間で、月間九〇〜一〇〇人という。検索にはコンピューターが

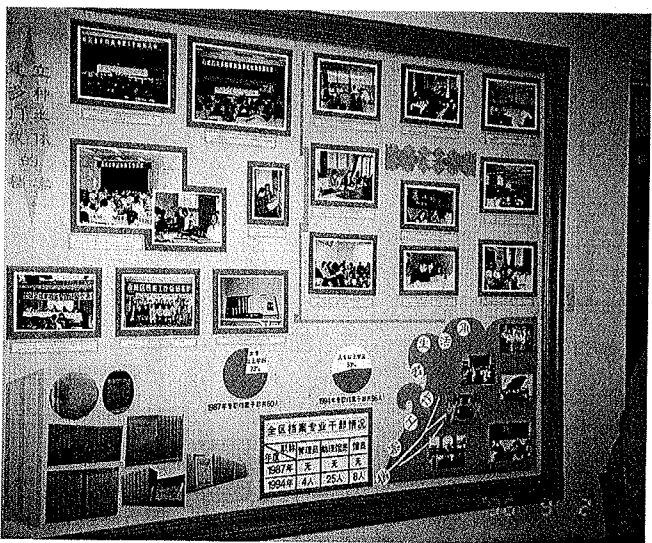


写真1 西城区档案馆の展示

に降雨日はたったの二日)ということであったが、朝からの雨、それも本降りであった。そんな中、中国国家檔案局のはからいで全史料協ツアー組ほか日本人参加者は

五年前に導入されている。折から狭い閲覧室に数名の閲覧者がいたが、いずれも刊行物史料を手にとっていた。展示室が二室ほどあり、档案馆の活動を図や写真を使って紹介し、ガラスケースにはやや不容易に檔案が陳列してあった。なお、懇談の場には、日本語を話す北京市檔案学会理事長王国華氏も同席。

一〇時五〇分からは西城区柳荫街にある恭王府花園(全国重点文化保護単位、つまり日本でいう国指定文化財)を見物。皇帝の離宮跡で池庭や建物からなる。ここでわが国の漫才に相当する笑劇などを皇帝らの坐った席に腰を据えて見物した。満々と茶が注がれ、菓子類も出された。正午、当園協のオープンしたばかりの四川飯店に案内され、若い曹壇林副区長主催の午餐に招かれた。そして一四時、本大会の会場である故宮の北方に位置する北京アジア大会選手村の中にある国際会議センターへ移動。五時五七分、予定より三分早く開会式が始まった。国を代表し、李鵬首相が歓迎の挨拶を行い、会場二

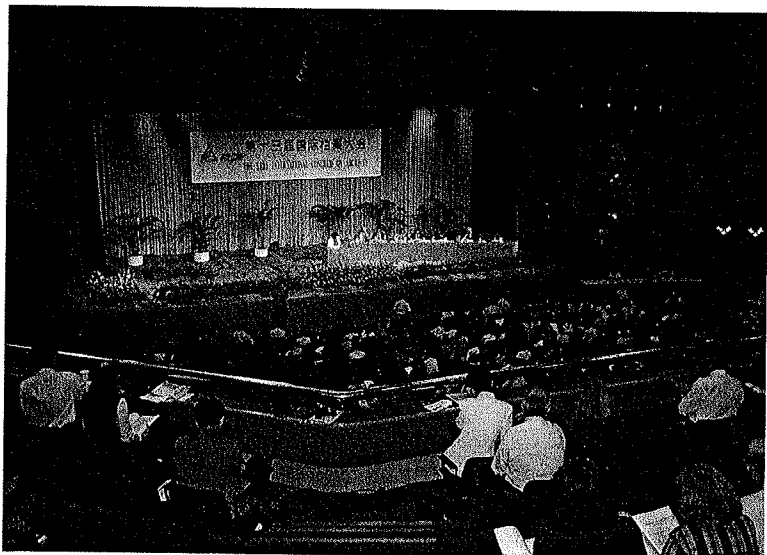


写真2 全体会の会場風景

五〇〇の座席には座りきれぬ参加者があり、私自身、首相の顔は拝みづらかった。会場入口でボディ・チェックをうけたが、その理由はここにあった。

この前週、つまり八月最終週には、同じ会場で第六十二回国際図書館連合会議 (IFLA) が開催され、同じく李鵬首相が挨拶、二千人余を集めており、中国の国際社会への意気込みを痛感させられた。

事前の予定書には、基調講演があるということだったが、開会式だけで一六時四〇分頃には終了。一八時から場所を近くの中華民族園に移し北京市主催のレセプションが催された。わが国というと、犬山市の明治村に相当し、中国各民族の伝統的な建物が約四五ヘクタールの中に散在していた。このとき、すっかり雨は上っていた。

九月三日(第二日目)、九時からセンターで基調講演に続き、第一全体会が行われた。今大会の総括テーマは「二十世紀をしめくくる文書館活動―回顧と展望」(前大会のテーマは「情報化時代の専門家・アーキビストを考え

る)、第一全体会のテーマは「一九九〇年ブリュッセル会議に始まる文書館界の国際協力」。この夜、全史料協参加者の夕食会。これに来日体験を持つ中国檔案館界の人々も加わった。私の側には、一九五一年創刊という雑誌「中国档案」の編集者呉紅女史やわが山口県文書館にも来館したことがあるという中国人民大学檔案学院馮恵玲教授があつた。

「中国档案」出版社(一九八二年発足、スタッフ一五名)は中国の檔案界を統括する中国国家檔案局の管轄下にあり、毎月四万五千部を刊行、一部三元(このときの為替レート、一元約一三円)で販売し、経営は雑誌の販売費と広告費で賄われているという。「中国档案」のほかに、今回私の手許にのこった雑誌に「檔案学通讯」(中国人民大学主監で隔月刊、定価五・九元)と「檔案学研究」(中国檔案学会主監で季刊、定価五・五元)がある。中国全土で檔案に関する雑誌は七〇余発行されている。また「中国档案報」という新聞も取得した。そして、九月

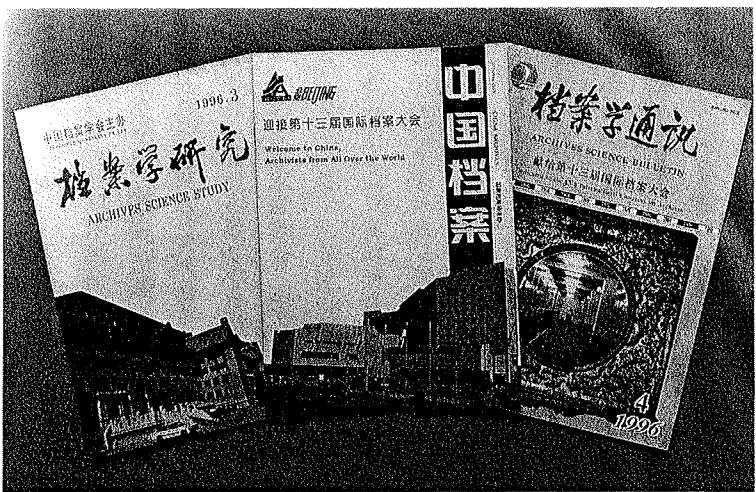


写真3 档案に関する雑誌



写真4 档案に関する新聞

二日付け「人民日报」は、一面に「開創新世紀的档案事業」との社説を載せていた。

馮教授は、九月六日の第三全体会（オランダの文書館ハンドブック出版以来の文書館の理論と実践の相互作用）の基調報告者（タイトル「文書館文献の評価」）であった。なお、各全体会では、基調報告のほか総計一七本の補足報告があり、総勢二二名が登壇したが、その内訳は、アメリカ・オランダ・中国各二名、ドイツ・イタリア・フランス・スペイン・イギリス・スウェーデン・ポーランド・スイス・ロシア・カナダ・マレーシア・コスタリカ・ギニア・ナイジェリア各一名、それにユネスコから一名である。

九月四日（水）、午前中の第二全体会のテーマは「文書保存にかかる法令構成とその基盤の継続性と変遷」、午後は市内档案館見学。私は、中国第一歴史档案館を選んだが、他に人民大学档案学院・北京市档案館・北京城市建设档案館・中央档案館・写真档案館のコースが設定さ

れていた。山田は、北京市档案館に赴いた。

このとき頼りになるわれらツアアの中国人通訳が付添ってくれたのだが、それでもバスに乗違える始末だった。だが、そのお蔭で故宮の中を乗用車で駆け抜けるという貴重な体験ができた。

中国第一歴史档案館（一九二五年故宫博物院の成立に伴い発足）は故宮内西側の西華門近くに宮城形式の伝統的建物（一九七六年建造、総面積一七六〇〇㎡）として立つ。この档案は、明清時代の一千万件余からなる。麻布で包まれた全く手つかずの档案が累々と箆筒に詰め込まれていた。書庫面積は八〇〇〇㎡。装演やマイクロフィルム撮影の実況も見せて貰った。職員数は一五四人。

また、故宮の南東側に皇史宬という中国最古の档案庫（一五三六年竣工、面積三四〇〇㎡、石造）がある。明清時代の档案を納めていた銅はり箱が整然と並んでいた。ここは全く一般公開されていない。無論、今日箱の中は空っぽで、右記の第一歴史档案館に移されている。

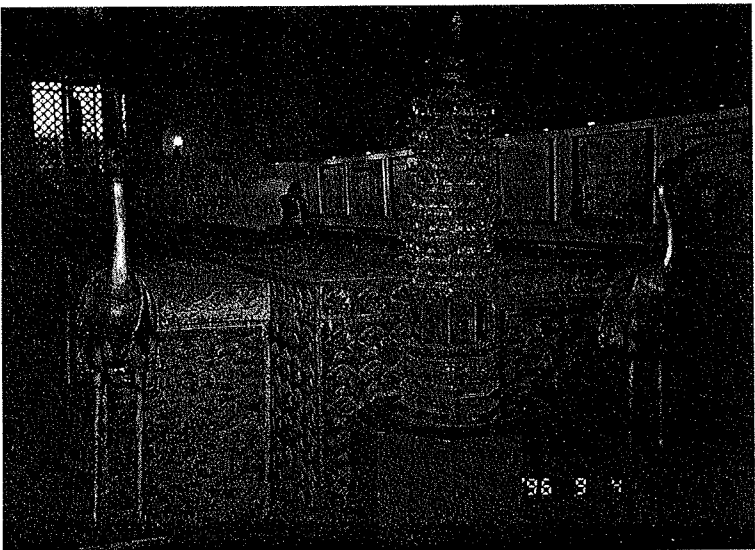


写真5 皇子成の内部

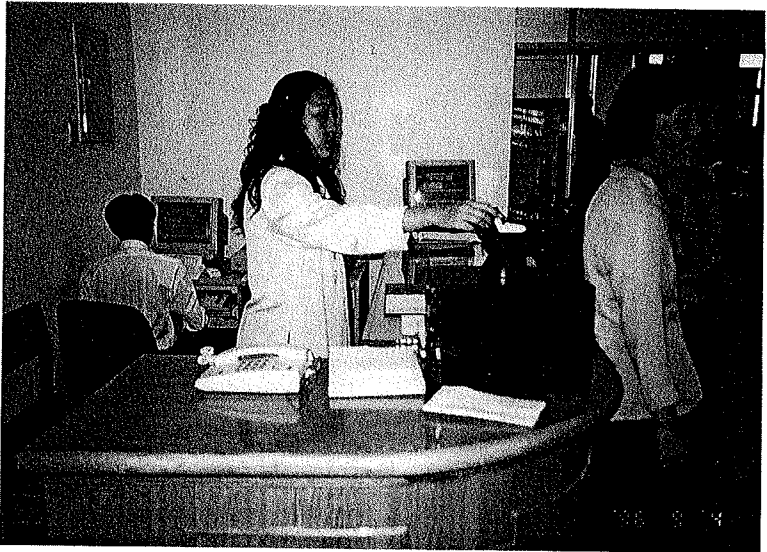


写真6 北京市档案馆のカウンター

北京市档案馆(一九五七年設立)は、北京人民政府直属の文化施設。近年完成した新館は地上十五階・地下二階建、建築面積一八三〇〇㎡で、三〇〇万件収蔵可能という。現在の収蔵檔案は一二二万件で、書架総延長は七・八km。市政府の檔案が四分の三以上を占め、最古の檔案は嘉靖十二年(一五三三)という。ビデオ・映画フィルム等の「声像檔案」も収蔵。コンピュータによる檔案整理・マイクロ化も進んでおり、展示室も広い。

なお、中国には三六〇〇もの檔案館があり、アーキビスト(専門職員)の数はざっと一〇〇万人に達するといわれる。

この夜は、政府主催の歌と踊りの夕べがセンターで行われた。

九月六日(金)、午前中第三全体会、午後は天安門広場周辺を散策。中国歴史博物館前では香港返還(今年七月一日)までの日数を電子表示する大看板が立っていた。広場では観光客相手の凧が高く高く揚がっていた。ホテ

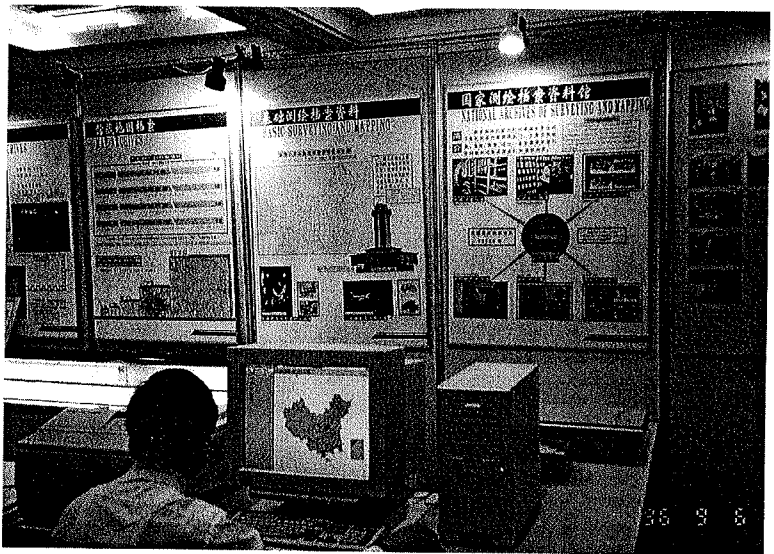


写真7 中国档案事業成就展覽の会場

ル(二十一世紀飯店)に帰る交通手段として地下鉄を利用(車賃二元)。

九月七日(土)、午前中第四全体会(テーマは「近代技術が文書館と文書館業務に及ぼす影響」)。一六時半から約九〇分にわたり開会式。この間はセンター内で同時開催の総合展示(「中国档案事業成就展覽」)や文書館用具設備見本市などを見学。いづこも大変な人ばかりであった。とくに前者については、中国の档案事業の全貌を紹介したもので、その解説の中には、高校教育にもアーキビスト養成のコースがとり入れられていることを見出して驚いた。また各省毎の档案事業の実況を伝えるコーナーがあり、貴重な古文書などを展示する省もあった。

全体会は基調・補足報告のあと、時間を限って自由に感想や意見を陳べることが許されていて、各会毎に十数人が登壇した(例えば第四全体会で使われた言語は英語五名、中国語三名、ドイツ語・フランス語・スペイン語が各一名)のだが、残念ながらここに日本人の姿を認め

ることはできなかった。とにかく、全日程を通じ日本人はひとりとして壇上に上ることはなかったのである。

九月八日(日)、帰国の日。結局雨は二日と七日の午前の小雨だけだった。飛行場には八時前に着いたのだが、飛行機の離陸は一一時二〇分であった。場内は大変な人だかりで大混雑していた。

市内でリュックを背負う少女を見かけたし、自動車電話をかける者もいた。ビルの建設ラッシュ中でもあった。

ところで、中華人民共和国档案法の施行は一九八八年一月一日である。センター・ホテルはもとより、市街のいたるところで今大会の開催と档案事業の推進を訴える赤の垂れ幕や横断幕に出会わした。ちなみに、わが国の公文書館法制定は一九八七年十二月十五日、施行は一九八八年六月一日である。

次回第十四回大会は、二〇〇〇年スペインのセビリアで開催される。

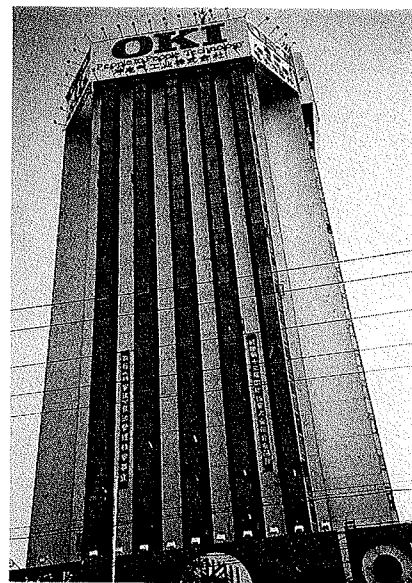


写真 8 市内ビルの垂幕